平成28年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K25	氏　名	杉山　浩規
研究主題 ―副主題―	学校経営の活性化に資する若手教員の育成における一考察 ―学級力向上の取組を核にした実践を通して―		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	遠藤　真司
所属校	西東京市立けやき小学校	校長	高橋　亨

キーワード： 学級力向上プロジェクト　アセスメントツール　主体的・対話的で深い学び

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

現在、東京都の公立学校においては、教員の大量退職と大量採用の時代に入り、ベテラン教員が現場で培って得た経験を若手教員に確実に伝えていくことが大きな課題となっている。しかも、保護者や地域の要望の多様化、教員全体が授業以外の複数の業務に対応しなければならない現状などがあるため、教育現場で若手教員の育成を着実に行うことが困難な状況にある。東京都教育委員会が平成20年10月に示した「東京都の教育に求められる教師像」には、⑴ 教育に対する熱意と使命感、⑵ 豊かな人間性と思いやり、⑶ 子供のよさや可能性を引き出し伸ばす、⑷ 組織人としての責任感・協調性・互いに高め合う、という四点が記載されている。これらを踏まえた人材育成を行うためには、若手教員が迷いを抱かず、安定した学級経営を行えるメソッドが小学校現場に必要であると考える。しかし、現場にはその様な手法が明確にされておらず、その点に問題があると考えた。そこで、本実践の核に据えるのが、「学級力向上プロジェクト」である。各種のアセスメントツールの活用を通して、学級状況と教師自身の学級マネジメント力を把握することが可能になり、学級の課題の克服と改善を的確に行えるようになると考える。さらに、授業モデルの活用を通して、基礎的な授業力の向上を図るとともに、様々な学習活動を通して学級力を高めていけるよう、児童の協同性と教員の授業の幅を広げることを目指した「主体的・対話的で深い学び」の要素を盛り込んだ授業を実践していく。これらの取組を通して、基礎形成期の若手教員の学級経営力の向上を図り、学校経営の活性化に資する人材の育成に寄与することを目的とする。

２　研究の内容・研究の方法

（1）学級力向上プロジェクト（田中2013）の実施

この活動では、最初に学級力アンケートを実施する。これにより、児童は自分たちの学級の様子をセルフ・アセスメントし、その結果を学級力レーダーチャートで可視化することを通して、診断結果を学級全員で共有し、学級力向上のための取組を実践していく。学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム、学級力向上のために子供たちが主体的に取り組むスマイルアクションという三つの活動を、１年間のR-PDCAサイクルに沿って意図的・計画的に学級活動において実施していく。

（2）各種アセスメントツール・ビジュアルワークショップ・授業モデルの活用

学級担任は、自己の学級経営について自己評価する指標となる学級マネジメント力セルフチェックシートを基にして、現状の把握を客観的に行い、自分の強みと課題を明確にし、学級力アンケートの結果も踏まえ、学級活動におけるスマイルアクションを主軸にして学級経営の改善に取り組んでいく。また、文部科学省が示している予防的生徒指導の三機能を生かしたイラストカードを用いて、行事・教科・特別活動・道徳などを、いつどのように関連させて実践していくのかを図表に表すビジュアルワークショップを実施することで、計画的な学級経営へとつなげていく。さらに、授業後のリフレクションにおいて、授業モデル及びAL授業評価チェックリストなどの活用を通して、若手教員の幅広い授業力の向上を目指すとともに、日々の各教科の学習指導における学級力向上への意識も高めていく。

本実践の対象は、公立小学校第４学年（児童数32名）担任Ｙ教諭、20代男性、教職歴３年目。自助資源は、子供たちに対する穏やかな姿勢である。学級の状態としては、男子児童数名が授業中に勝手な発言をしてしまう様子が見られる。また、全体的に指示待ちの児童が多く、自分たちの力で学級を動かそうとする主体性に欠ける面がある。これらの課題を克服するために、授業参観、Ｙ教諭へのコンサルテーション及び日常の授業のリフレクションを学年の教員や管理職との連携に基づいて実践していく。

本実践では、学級活動を中心にＹ教諭が課題意識を抱いている算数科・道徳・社会科を中心に、主体的・対話的で深い学びの要素を盛り込んだ授業実践を実施していく。

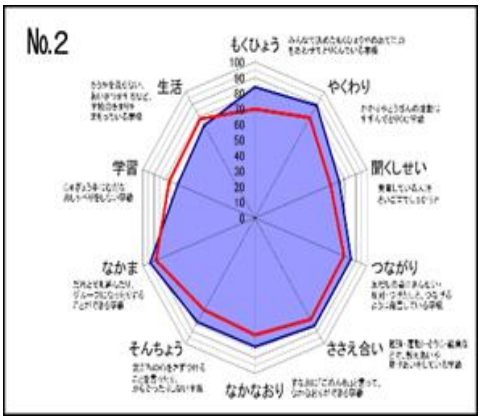
実践内容は、以下の表に記載の通りである。

月	４年Ｘ組に対する取組	Ｙ教諭に対する指導・支援内容
６	①第１回学級力アンケート	○授業参観及び話し合い（学級の分析と今後の学級経営・授業の進め方など）
７	②第１回スマイルタイム ③第１回AL児童アンケート	○マネジメント力セルフチェックシート、AL授業評価チェックリストの診断
８	④ビジュアルワークショップ	○ビジュアルワークショップの実施 ○２学期の取組に関する打ち合わせ
９	⑤算数科の授業実施	○算数科（教えて考えさせる授業＋授業モデルを活用した授業）の実施
１０	⑥道徳の授業実施（友達関係パワーアッププロジェクト） ⑦第２回学級力アンケート及び第２・３回スマイルタイム ⑧社会科の授業実施	○道徳（単元型学習）の実施 ○学級力レーダーチャートを基にした学級会の実施及びはがき新聞の作成 ○社会科（ジグソー学習）の実施
１１	⑨第２回AL児童アンケート	○マネジメント力セルフチェックシート、AL授業評価チェックリストの診断

３　研究の結果

（1）学級力アンケートから

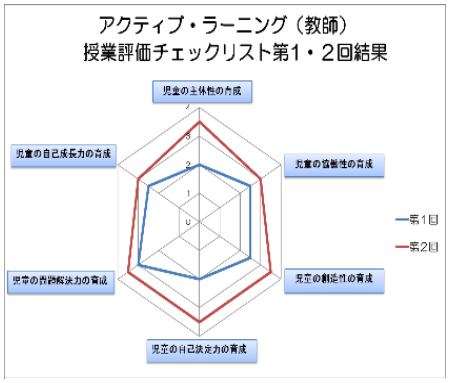
第１回の課題であった「もくひょう」「聞くしせい」の項目の数値が上昇した。また、友達関係パワーアッププロジェクト（道徳）の影響もあり、「なかま」「そんちょう」「なかなおり」「ささえ合い」「つながり」の数値の上昇も見られた。しかし、「生活」「学習」の項目の数値の下降が見られた。（図１）この課題に対し、第２・３回スマイルタイムで、児童は話合い活動を行い、課題を解決するための作戦を自分たちで作ったアクションカードに表し、「廊下を歩く」ことや「授業中の私語を減らす」ことを次のクラスの目標に掲げた。本実践では、児童が自分たちの力で学級を高めようとする積極的な姿勢が見られた。



（図1）学級力アンケートの結果

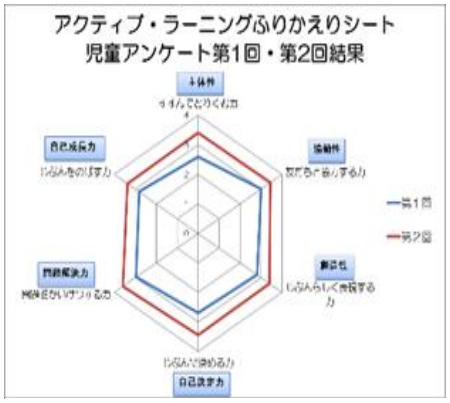
（2）AL 授業評価チェックリストから

学級マネジメント力セルフチェックシートを基にして、Ｙ教諭の学級経営の現状把握を客観的に行った。自分の強みと課題を明確にし、学級力アンケートの結果も踏まえ、学級活動におけるスマイルアクションを主軸にして学級経営の改善に取り組んだ。



（図2）授業評価チェックリスト（教師）の結果

授業実践をした放課後には、板書を撮影した写真をプリントアウトした物、授業チェックシート、リフレクションシートの三つを中心に活用し、リフレクションを実施した。話し合いの中では、なるべくＹ教諭が主体的に自らの実践や今後の改善点などに気が付けるようにするとともに、Ｙ教諭の授業改善への意識を前向きに高めていくように心がけた。また、同じ学年の先生方にも、授業やビジュアルワークショップの取組を見てもらうことで、多面的に助言を得られるよう取り組んだ。さらに、学級力や授業力の向上に不可欠な主体的・対話的で深い学びの促進を図るため、AL 授業評価チェックリストを活用し、客観的に現状把握を行った。（児童にも同じ内容項目の AL アンケートを実施）その結果、児童もＹ教諭も主体性や自己決定力という同じ項目を中心に課題が見られた。そこで、これらの課題を克服するため、算数科（教えて考えさせる学習）、道徳（単元型学習）、社会科（ジグソー学習）の実践を通して、授業改善を行った。授業実践の取組の成果は、（図２・３）の通りである。



（図3）児童アンケートの結果

４　研究の考察

学級力向上プロジェクトにおける各種アセスメントツールの活用により、客観的かつ多様な視点をもって、若手教員の学級経営力の育成に取り組むことができた。また、本実践では、具体的な学級運営や授業実践の方法を日々の取組や放課後のリフレクションを通して身に付けることで、目の前の子供たちの成長に貢献できる喜びと手ごたえを若手教員が抱くことにより、学級経営に対して自信をもって臨む姿勢が見られた。さらに、基本的な授業力の育成を基にして、主体的・対話的で深い学びの要素を盛り込んだ授業の実践を各授業で多様な形態で展開したことにより、児童の学習面の意欲や技能面だけではなく、学級力の向上につながることが示唆された。

５　今後の展望

何より大切なのは、多忙な学校現場における若手教員育成の体制づくりだと考える。また、校内研修やOJTなどの取組により、支援側のアセスメント力の向上や学校内のアセスメントの実施機会の拡充を進めていくことで、客観的な児童理解に基づいた学級経営が校内全体で行えるようになると思われる。

さらに、若手教員の学級力と授業力を高めていく主体的・対話的で深い学びの要素を盛り込んだ授業実践の開発を行うことにより、よりよい学級づくりへとつながるはずである。こうした若手教員が安定した学級経営を行える手法を学校現場に広げていくために、今後も貢献していきたい。